

月を仰いで

第一歩

吉水 岳彦

来世はあるの？

みおしえ

いま極樂を求めん人は、本願の念佛を行じて、摂取の光に照らされんと思しめすべし。これにつけても念佛大切に候。よくよく申させ給うべし。

法然上人

かいせつ

この一節は、『平家物語』にも登場する源氏方の関東武士、上野国大胡（現、群馬県前橋市）の太郎実秀の妻に宛てた法然上人のお手紙の文章です。大胡氏は古くからの法然上人の門弟であり、そのお手紙の内容はわずかなあいさつ文の他は、教義的な疑問に対するお答えとなっています。実秀夫妻が、いかに深く法然上人に傾倒して真剣に教えを求めていたかがうかがえるとともに

に、関東武士の実秀やその妻に対しても、わけへだてなく丁寧な専修念佛の重要性を説き示す上人の細やかな思いやりが感じられます。

お手紙を拝読すると、来世に極樂世界へ救いとおっていただくのに、お念佛以外の修行などをまじえて良いかどうかを実秀の妻が尋ねたことが察せられます。これに対して、迷い多きわたしたちが来世に慈愛の光に満ちた極樂世界へ往き生まれるためには、阿弥陀如来様がご用意された称名念佛を申すほかには道がないと法然上人はお示しくださっています。

阿弥陀如来様が佛と成って、すべてのいのちあるものを救おうと誓われたそのご本願の目的は、苦しみの世界に沈み、自力で抜け出でることができずにいる者を永遠のやすらぎの世界に救いとり、菩薩として生まれ変わらせ、そこで自分と同じさとりを得てもらうことにあります。親が子に、自分の持てる財産をすべて譲り渡そうと願うように、自分と同

じ佛位にのぼることができるよう、劣悪な環境から自分の膝元に迎えとつて直接育てようというのが、如来様の想いです。それ故に、幼子が不安のうちに「ママーっ！」と泣いて呼ぶように、自分の名を「南無阿弥陀佛」と呼びなさいと、如来様ご自身が救いの要件にお念佛を定めてくださったのです。わたしたちは、そのお言いつけの通りに如来様におすがり申し上げれば、如来様はいとし子にお乳を与えるがごとく救いの光明をもつてお育てくださり、この世の生を終える時には慈愛の懷に抱きとめて極樂へとお迎えくださるのです。

いま来世に極樂へ生まれたいと願うならば、如来様の願いの通りにお念佛の一行に励み、その救いの光に照らされようと思うことが大切なことです。如来様は慈光によって信心をお育てくださり、わたしたちもお念佛を申しながら如来様を近くに感じて、佛の子としてふさわしい人になろうと願うようになってゆきます。そのように如来様とわたしたちとを深く結びつけ、最期臨終の時に極樂へ迎え導いてくださるお念佛はまことに大切なものです。往生極樂のためには、如来様の光明摂化が欠かせないとのお示しを大切に受けとめ、法然上人を善きお手本として、よくよくお念佛をお称えになつてくださいます。

おはなし

春に咲く花はたくさんあるのに、なぜ多くの人が桜の花に魅かれるのでしょうか。冬の寒さが終わる頃、にぎやかに咲く花たちの姿にあたたかな団らんと出会いの雰囲気を感じるからでしょうか。はたまた、その散りゆくはかなさに別れの意味を考えさせるからでしょうか。世間の出来事とは無関係であるかのように咲く花を愛でながら、すべてのものは生まれ変わり死に変わるといふ、無常の道理を教えられます。亡き大切な人に想いを馳せるにも、春は良い時期かもしれません。

愛する人を亡くした方々がお集まりになる場にて、精一杯の法話を終えて帰ろうとした時のことでした。高齢の女性が近寄ってきて、「今日はお話をありがとうございました。ここへ来るのができて本当に良かったです。でも、もう一つだけ聞きたいことがあるのですが……」と仰せになりました。わたしが「どうぞ」と答えると、しばらく間があつて「来世は本当にあるのでしょうか」とお尋ねになりました。

真剣な面持ちで問われた内容の重さに戸惑いつつ、「どうして来世のことをお尋ねになるのですか」と問い返しました。すると、涙を流しながら「実は長年連れ添った夫を

少し前に亡くしまして……。ずっとそばに居てくれると思っていたし、そう感じているのに、来世があるなんて考えるのはおかしいと思ってしまうている自分もいて、苦しかったんです」との言葉が返ってきました。おぼろげながらも、愛する亡き人は自分のそばにいてくれると感じているが、それに確信が持てないため、ハッキリと来世への生まれ変わりと教えてほしいとの想いが伝わってきました。

法話のなかで、阿弥陀如来という佛様のお名前を「南無阿弥陀佛」とお呼びすると、最期の時には極楽へお迎えくださり、この世に遺した人々のことを自由自在に見守り導く、菩薩という光り輝く存在に生まれ変わらせてくださることをお伝えしておりました。それゆえに、その確信となる言葉が欲しいと思われたのでしょうか。

わたしは、「わたし自身、長く共に暮らした大切な人と別れねばならないと思つたら、きつと堪えられないと思います。でも、そんなわたしたちの弱さやはかなさをご存知の如来様だからこそ、疑いのないことだと思つています」とお伝えすると、ホッとされたお顔で帰つてゆかれました。

亡き愛する人をどのように思えばいいのかは、死を免れることができないわたした

ちの誰もが悩むことでありましょう。大切な人を喪つたとき、自分の生の土台が崩れていくような感覚に陥り、生きていく力を失うことさえあります。だからこそ、あたかも月の光を頼りに闇夜を歩むように、祖師たちの言葉を信じ、常に救いの光で照らしてくださる如来様や菩薩様たちの存在を感じながらお念佛を申すことが生きる力ともなるのです。そして、祖師の言葉の通り、この世を終えてからも、いままでとは異なる形で大切な人と共に生き続ける道があることも、疑いなきことなのです。

この連載では、そんな尊い祖師の言葉に可能なかぎりわかりやすい解説を施しつつ、さまざまなエピソードを交えてご紹介して参ります。拙い筆ではございますが、精一杯努めてお伝えいたしたく存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

南無阿弥陀佛

合掌

